
緑大作戦

哀妃紗 煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑大作戦

【Nコード】

N3884W

【作者名】

哀妃紗 煉

【あらすじ】

伝説の学校（何が伝説かわからない）として有名な学校で

主人公 双坂 優葉と槍先 槍牙が出会い、古の楽園を創るため「
緑大作戦を行う物語。」

現在休筆中です。

始まりはいつもアレ

私、双坂 優葉は高校二年生。

今、ある男性にとても興味がある。でも、恋愛感情とかじゃない。それ以上に問題なことがある。それは、私が一年のころに入った部活。「緑部」に興味本意で入ったことが私の人生の大きな変化。

最初はボランティア活動としかしてたけど、一年経って、一人の男性が入部してきたことよって変化してしまった。

(一人の男性と興味がある男性は同じ)

その男性は部室に入ったとたんに「この部活の真の活動をする」とか言って滅茶苦茶し出した。

人気無い部活だから先輩がいなくてその男性はやりたい放題……

なんで先輩いないの……と心の中で何度もつぶやいてる。

でも仕方ないことだった。ボランティア活動とかみんな面倒とか言ってるし、そんな部活に男性部員なんて来ない。

まあいつか、面白いし……

いろいろあつて、今私は通気口の中にいます。

なんでこんなところにいるのなあ？考えると腹が立ってきて

「ふざけるなあああああー」

「何だ今の声は？」

「どこから聞こえたんだ？」

しまったああああー、つい声出しちゃった。

なんで私だけこんなところにいるのかしらねえ。

確かに私には凹凸はないけれど！

チビだけど。

失礼すぎるのよ。槍先槍牙は！

なんで私はこんなところにいるのかというと、この会社が森を削ってゴルフ場作るって言ってるから止めに来てるんだけど

これ部活動？

違うでしょ？こんなの違う。私の望んだ学校生活と違う！

今考えればスゴイ部活よね。

表向きはボランティア活動、裏では自然完全保護。

悪く言えばテロリストとかになりそう……。

そもそもなんでこうなったかというところ、いつものように槍先やじさき 槍そ 牙うがが「緑危機みどりききだ準備しろ」って言って私の頭を撫でて、「今回はゴルフ場創造阻止だ」で始まったのよねえ……。

なんであいつはいつも私の頭撫でるのかしら！そう心の中で叫んでドンと通気口を殴ると、警備員たちが「そこか！？」と言ってこっちに来ちゃった……。

どうしよう。このまま私の人生終わるのかなあ……。

「あーあー。社内の方々は今すぐ外に出てください。繰り返します

……」

ふっ、助かった。

……ん？なっなにこの揺れ！？とにかく出なきゃ。

外に出てビルを見てみると、信じがたいことにビルが地面へと沈んでいっていた。

「……うそ、まさか本当に地盤を崩した……！？」

槍先あいつ槍牙を探して辺りをキョロキョロ見回した。

「よっ」

「ひゃあっ」

突然背中を押されて声を掛けられた。その人はあいつだった。

「うまく行っただろ？」

「うん、……てか私が通気口に入る意味あったの？」

「ああ……ない」

意味なかったって！？こいつあとでぶつ殺す！！

「意味がないのに私を危険な目に遭わせたって言うの？」

「ああ、ごめん。意味有ったよ。囿として」

なんでそうゆうこと笑顔で言えんの？

「困って……」

「どうせ、騒いだり大声出したりしたんだろ？」

完全にこいつの手の上踊らされてたつて言うの！？マジで殺したくなってきた……。

「……まあ、その話は置いて。あ、でもあとでゆっくり聞かせてもらうからね！」

「はいはい」

くっそぉ〜殺したいいいいー。殺してもいいよね？いいよね？こんなやつ殺してもいいわよね？

「あんたさあ、ホントに地盤崩したの？」

「ああ、こつ……ヒュツつてあっさりとな」

顔に手をかざして何かを投げるしぐさをして、ニコツつと笑ってきた。

こいつはいつでも殺れる。なぜなら「緑部」の部員はみんな自分専用の武器を持っているから。その武器はこいつが全部用意した。因みに私の武器は十手の形をした刀で二刀流。

「あっさりってどうやったのよ！」

「だからこつ……」

「そうじゃなくて……もういいわ」

こいつは……呆れるしかないわね。

ため息をしながら学校へ向かった。すると、あいつが話しかけてきた。

「お〜い、待ってって優葉。話しようぜ」

「うるさいわねえあんた、死にたいの？」

「いやそう言うわけじゃないけどさ」

「じゃあ、話しかけないで」

まったくこいつはなんで私にちよっかいけるのかしら。

入部して変なこと言っからすぐに私の頭撫でるし、お姫様抱っこしてくるし、ああもう嫌。考えただけでイライラしてくるわ。

「待ってって言ってるだろ？」

「しつこいわねえ。ついてこないで」

そう言って前に振り返った瞬間、私の頭を撫でてきた。……ああ、

アレね。始まりね。

「緑危機だいくぞ」

ああやっぱり……。

こっして私の一日は過ぎてゆく。

一ヶ月後の下克上（前書き）

やうちきそうが
槍先槍牙視点です。

一ヶ月後の下克上

俺が入部してビル倒壊事件を起こしてから一ヶ月。双坂そうさかは初めは振り回されているようだったが、少しずつやる気が出てきて部の上下関係がすっかり変わってしまった。

俺があいつに振り回されるなんて……笑える。

逆に俺はやる気がなくなった。何故か五月の終わりらへんになるとやる気がなくなる。

「はあ〜」

ため息を吐くと同時に後ろから襟えりをつかまれ、引きずられ罵声ののしりを浴びせられた。

「ちよつと何寝ぼけてんのよ。ほら、部活始めるわよ」

「うへえ〜、めんどくせえ〜」

「何か言ったか・し・ら？」

「な、何も言つてねえーよ」

放課後はいつもこのように部室へと連れて行かれる。

サボりたいけど今までみんな振り回したし、無理だな。引きずられながらそんなことを考えた。

「槍牙、今日はダム建設阻止よ！」

「えらく大胆な計画だな。裁判されたらどうするんだよ？」

「それはあんたの役目でしょ？」

「はあ〜」

ため息を吐き、つかまれてた双坂の手をはらって部室へと先に向かった。

「しかたねえから何とかしてやるよ」

「へ〜、じゃあ今から行きましょ」

「ははは……無理言つなよ」

今日は結構無理やらなきゃダメだなこりゃ。心の中でつぶやき、作戦を考えた。

もう作戦を考えてるなあ俺。俺は結構順応が早いみたいだ。

「こんにちは、槍牙先輩！」

部屋のドアを開けるとすぐにあいさつが聞こえた。

相変わらずこの部活は元気あるな。ビル倒壊事件からいきなり入部希望者増えたしなあ。

「今日の作戦を考えるぞ」

「はい！」

作戦……ダム建設阻止。しかし、その住民の許可をもう得ている。こうなると反対運動は無理か……。

なら、絶滅危惧種がいればいいだけだ。それなら手っ取り早い。

「今回の作戦は簡単だ。まず……」

「え！？ちよつとどう言う事よ。ダム建設阻止よ」

「あわてるな双坂。俺だから簡単なだけだ」

「どう言う事よ？」

ああ、しまったなあ、俺の秘密をバラす訳には行かないし、どうにかしないと。

「えっとそれはだなあ、その場所には絶滅危惧種がいるから、それを探すだけだからだ」

必死にごまかそうとしたが、双坂は鋭く、俺の矛盾を突いていた。

「あれ？おかしいわね。それだったら『俺だから』は違うんじゃないの？」

まったくうまく行かないなあ。

「ああそれは俺がその絶滅危惧種の生態に詳しいからだ」

「……そう」

何とかごまかし切れた。俺の秘密がバレると厄介だからな。

それから作戦を詳しく伝え、その地域へ行き、作戦を開始した。作戦はみんなは待機で俺が一人でその動物を探す。それだけだ。

「しっかし、みんなよくこの作戦に賛成してくれたよなあ。みんなで探した方がいいと言わなかったし。まあ、双坂は文句言ってたけどな」

そうつぶやきながら俺は森の奥へ向かった。

別にそこに動物がいるわけじゃない。秘密がバレないように人気ひとけのない所が好都合だったからだ。

「ここらへんでいいかな」

俺は絶滅危惧種のオオサンショウウオを思い浮かべ、そして復活・再生・複写・生態系をイメージした。

そして右目の瞳の奥に現れた光を手をかざして取り、地面に落とすた。

「生態系に異常が出ないといいな……」

光は大きくなり辺り一面に広がり、オオサンショウウオが現れた。

よし、これで大丈夫だ。一安心すると、ガサガサと足音が聞こえた。

「何だ？」

慌てて振り返ると、そこに双坂がいた。

「……つつ！？」

しまった、見られた。これは言い訳はできない。

「……ちよつとあんた……何してんの……よ……」

「くっ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884w/>

緑大作戦

2011年10月9日15時44分発行